



Short Scale



vol. one

CMY-KEI

真っ暗な中で目が、覚めた。

「此処は……？ええと、僕は何をしてたっけ……」

何処へも視線を定める事の出来ない黒一面の世界で、少し前の自分を投影させる。

コーヒー缶が頭に当たったのは、覚えている。それで確か、土手を転がって……。ええと、なんだっけ？

思い出そうとすると、胸の辺りが痛くなった。

『これって……恋？』なんて安っぽいドラマのような台詞を思い出したけれど、そんなロマンチックなものじゃなくて、どう考えても殴られた後の嫌な痛みでしかない。

「誰だよ、こんなに強く殴った奴」

上下も左右も分からないこの場所で、悪態をつく。その悪態はしばらく反響して、闇に飲まれた。

そんなことよりも此処は……、一体何処なんだろう？

真っ暗な……、所謂『闇』しか存在しないこの場所。

考えられる場所が1つだけある。

考えるだけで背中に嫌な汗が流れる。

でも、考えざるを得ない。

……ここはもしかして『死後の世界』ってやつじゃないのか？

そう……、それならこの胸の痛みにも納得がいく。

でも腑に落ちない。

何か、重要な事を忘れている気がする。

学校のこと？

家族のこと？

それとも誰か……、恋をしていた相手が……？

でも、なんだかどれもしっくりこない。

ぐるぐると考えが頭の中を走り回る。

僕は、何を忘れていたんだろう？

答えがみつからない。

でも、頭の中の不安は1つが2つに、2つが4つに……と、ネズミのように増えていく。そして、そのネズミは頭の中を走り回って僕の希望を餌として喰らっていく。増えるネズミの量と比例して背中に流れる汗の量も増え、不安は自我を狂わせて、自分が闇の中に飲まれているような錯覚を作り出す……。

頭の中を走り回るネズミの足音が、五月蠅い。

誰か、こいつ等を追い出してくれ。

猫にでも、捕らせてくれ。

猫にでも……。

猫？

そういえば、此処に来る前に、猫を見た気がする。

確か、あれは鳴かない猫だった。

何処で……、見たんだっけ？

確か缶が頭に当たって、それで気がついたら猫が居て……。

ああ、そうだ……。

僕は土手を転げ落ちて、目を覚ましたら女の子のパンツを覗いていたんだっけ……。それが猫の柄だったんだよな……。それで……。女の子にみぞおちを殴られたんだ……。

どんな猫だったのかを思い浮かべながら暗闇に指で白線を描いていく。

星空に絵を描けるチョークでも貰ったら、こんな感じなのだろうか。

でも、流石にパンツは書かないだろうな。

ぼんやりとした記憶を探りながら暗闇に指で巨大な猫の絵を描き終える。

虎のような柄をもったその猫は暗闇に描き上げられると、のそり、と動き始めた。

にゃん、と鳴いてこちらへ向かってくる。

ぐにゃぐにゃとした線で少し不細工に描かれた割には、かわいい鳴き声を持っているその猫は、僕へと近付くと、また、にゃん、と鳴いた。

懐いているのかと思って、猫を見上げて手を差し伸べると、その手に水滴が落ちてきた。

「雨？」

その水滴の出所は、猫の口。

猫は僕を喰う気だった。

ネズミのごとく逃げ出した僕の後ろを、余裕について来て、にゃあん、と鳴く。

先程感じた可愛げは、何処かへと行ってしまい、僕の背中に汗が滲む。

暗闇の中、前に進んでいる感覚も無い中で、僕は走り続けた。けれど、猫は余裕で僕に追いつくと、前足で僕を踏みつける。

「は一な一せって！やめろ！僕を食べても美味しくないぞ！」

聞く耳を持たない猫は僕の顔を舌で舐め回す。

「ぞりぞりする、っていうか痛い！しかも、臭っ！」

臭い唾液が顔中に塗り付けられて、マーキングされた僕の顔の匂いを嗅いでうっとりとした猫は、ゆっくりと口を開けて、僕の頭にかぶりつく。

「うわあああああああああっ！！！」

跳ね上がるように起きた。

上がった息を整える為に意図的に呼吸のスピードを緩めながら、今自分がどこに居るのかの確認を始めた。

目の前にあるのは白い何かを置く台、それにその奥に格子みたいな鉄の塊、その少し前に布団が見える。呼吸する鼻で感じ取れた匂いは、アルコール臭だった。

ここは……。病院？

周囲にあるモノはクリームみたいな少し滲んだ白をしていて、遠くの方で誰かが耳鼻科に呼ばれている声がある。

そうなる、さっきのは夢だったのか。

ほっとして胸に手を当てると、鈍痛がした。

「あ、清澄（きよすみ）さん、起きたんですね」

声のした方に顔を向けると、白衣を着た男の看護師が部屋の入り口からこちらを見て微笑んでいた。

「先生呼びますから、まだ動かないで」

彼はそう言う、僕のベッドの脇にあるスイッチを押した。

「ああ、田村です。清澄さんの意識が戻りましたので、小林先生呼んで下さい」

僕はその声を聞きながら、入り口とは逆の方に目を向けた。

ブラインドから見える外の世界は、僕の知らない間に真っ暗になっていた。

医者が言うには、僕は胸への打撃で気絶をしたとのことだった。

幸い骨や内臓には影響も無いので、取敢えず明日明後日と入院して念の為に検査すれば大丈夫だそうだ。「救急車を呼んでくれたのは誰ですか？」と医者に問いみた。

「名前はちょっと私の方では……。でも中学生ぐらいの女の子でしたよ」

「そうなんですか……。その人は今何処に？」

「清澄さんの為に救急車を呼んで、一緒にこちらに来られたのは良かったのですが、何故か少しパニック気味でした。多分、人が倒れているのを見たのが初めてだったんでしょう。それで、ウチの看護師が落ち着かせたんですよ。で、清澄さんの傍で看病する、とまで言い出したそうなんです、またショックを起こされても困りますので、今日は家に帰ってもらいましたよ」

「そうなんですか……」

暗くなった病室で一人ベッドに寝転がりながら天井を見つめる。

不思議な一日だった気がする。

いつもならこの時間帯は家に居て本でも読んでいる筈なのに。

何が起こるか分からない。

それがまさか猫のパンツがキッカケだなんて誰も思わないだろうけれど。

ブラインドから漏れる月明かりで出来た不可思議な模様の月影を見ながら、今日自分が一時的に沈んだ世界のことを思い出す。

概念の全てが黒で塗りつぶされた世界。

光があるから出来たのではなくて、個として存在しているあの黒の世界。

出来るならもう、味わいたくは無い。

そう思った瞬間、猫の声がした。

それも出来れば味わいたくは無い、そう思いながら目を閉じて布団を被った。

胸に乗った布団の重みが、胸の打撲を思い出させて僕の額に皺を寄せさせた。

次の日。

いくつかの検査を終えた僕は自分の居る病室で鞆の中に入っていた読みかけの本を読んでいた

。

物語に入り込みすぎていた所為か、僕の視界に入るまで気付くことが出来なかった。

彼女に。

手に持っている物が、少し重い。
彼は被害者で、あたしが加害者。
それだけの、関係。

「あの……」

病室の入り口から何度か声をかけたのに、彼は声が聞えていないかのように本に集中していた。少しムツとして運動靴をパタパタ鳴らしながら部屋に入っていくと、彼がやっと気付いてくれたので、微笑んだ。

「あの……、えっと……。どなたですか？」

きよとんとした顔でこちらを見る彼の顔は、困惑に満ちていた。

ああ、そうか。

いきなり現れても分からないよね。

取敢えず名乗らないと。

「えーと、あたし、与那崎実子（よなさき みこ）って言います。はじめまして」

「は、はじめまして」

「あの、先日は猫の……、じゃない。えーとあたしのパ、じゃなくて……、ええと……」

パンツを見られたことを思い出して、頭に血が上っていくのが分かる。

考えがバターになりかねないぐらいに回って、目を回し始める。

「あの、だから、ええと。あんなパンツでごめんなさい！」

「へっ!？」

一瞬、自分でも何に謝っているのかが分からなかった。

なんであたし、パンツのこと謝ったの!？

それじゃあもっとセクシーなパンツなら謝らなくても……、って違う違う。

頭に上っていた筈の血は、いつの間にか頬に下りてきて、脈を打ち熱を放っている。恥ずかしさを自覚すると、声すらも出ない。弁解すら出来なくて沈黙ばかりが流れる。

自分の心臓がいつもよりどくどく言って頬に血を送り込む為に頑張っているのが分かる。

。

固まるあたしに声を掛けてくれたのは、彼だった。

「あの、与那崎さん、だっけ？」

「ひゃ、ひゃいっ」

素っ頓狂な声を聞いて彼は不意に顔を俯かせた。

「君は……、君は……」

俯く彼の表情が見えなくて、唾を飲んだ。

隠している顔が、怒りの顔だったら、どうしよう———？

心配しているあたしを嘲笑うかのように、沈黙が流れる。そして、彼が口を開いた。

「あははははははははははは」

それはベッドの上を転げ回るほどの爆笑だった。

「あははは、いや、ごめんごめん……。でも、あんなパンツでごめんなさいって……。あははははは」

「わ、笑いすぎですよ」

「あははは、は一あ……」

涙を手で拭いながら彼はそう言って、笑顔を此方に向けた。

「いいですよ、与那崎さん。幸い怪我は軽かったですし、あれは事故ですよ。なんていうかな……。偶然の事故とでも言えばいいかな。だから気にしないで。僕は大丈夫ですから」

「あ、ありがとうございます」

優しく微笑む彼の顔はどことなく楽しそうで、つられてあたしも微笑んでしまう。

そして、ふと、自分の手にかかっている『重さ』を思い出した。

そういえば、ここに来る前にお見舞いの品を買ってきたんだっけ。

「あの、そういえばお見舞いの品を買ってきたんです！」

「そうなの……。？そんな、明日で退院だから別にいいのに」

「いや、それだとあたしの気持ちが収まりません！是非受け取ってください！」

あたしは買った物をベッド脇の机に置き、袋を取った。

「……え？」

彼は、驚いているようだった。

確かに、驚くかもしれない。あまり花を見ることが少ないモノだしね。

「キレイでしょ？」

「う、うん」

「一番好きな花なんですよ！小さくてかわいくて……」

その花についていくつかのことを話そうとした時、後ろから女の人の方がした。

「清澄君、ごめんね～。1個検査を忘れてて……。って、あら、お客様？」

そこには昨日パニックになったあたしを落ち着かせてくれた女の看護師さんが居た。

「あれアナタは昨日の……」

「昨日はありがとうございました」

「いいのよ、パニックになるの仕方ないわよね。今日は、お見舞い？」

「はい！」

「清澄君も隅に置けないわね」

「え、ええ」

「どうしたの？複雑な顔して……」

「さっきあたしがお見舞いの品渡してからこんな風なんです」

「なになに、相当良い物貰ったんじゃない？それでビックリしてるのよ」

「いや……。あの……」

「もー、何モジモジしてるのよ。何貰ったの？見せて見せて」

あたしは机の上にあったお見舞いの品を看護師さんに見せた。

「これです！サボテンです！」

「えっ」

顔に似合わないくらいに低い声で驚いた看護師さんは、暫く口を開けたままでいる。

サボテンの花が、そんなに珍しいのかな？

「あのね……、サボテンはお見舞いの品にしちゃ駄目なの……よ」

「ええええええええええっ！？」

「根付くものは基本的に駄目なのよ……。病院に根付くなんて、縁起悪いでしょう？」

「そそそそそそ、そうなんですか？」

「ええ、でも仕方ないわよ」

看護師さんはあたしの体のつま先から頭の先まで見てから、此方に笑顔に向けた。

「まだ中学生じゃ、わからないわよね」

看護師さんの笑顔が、夕日より眩しい。

あたしは荷物を引つつかんで、ドアへと走る。

「中学生じゃないも——————ん！！！！！！！！！！」

負け惜しみのようにそう叫びながら病院の廊下を全速力でダッシュして病院を出る。外では、夕日がこちらを見て笑っていた。

「検査したけど、君の体に異常は無かったよ」

医者はそう言ったけれど、僕の生活には異常がありすぎた。

頭が時折痛くなるのは、あの与那崎とかいう女の子の所為な気がする。

「中学生じゃないもーん！」と叫んで何処かへ行ってしまったあの女の子は、大丈夫だったのだろうか……。

色々と。

「おーい清澄ー！」

僕が所属しているテニス部のキャプテンがこっちに向かってラケットを大きく振っている。

「はーい！ どうしましたー？」

「悪い、俺の携帯持ってきてくれねーか？そこに居る今云（いまい）学園の女子ソフトテニス部の子達にご挨拶をしなきゃと思ってさ……」

今云学園のソフトテニス部に視線を送る先輩の目は、明らかに挨拶だけでは終わらせないことを容易に想像させた。

「先輩……、下手な鉄砲は数撃って当たればいいですけど……、当たらない時の虚しさは恐ろしいぐらいですよ……」

「そうか……」

先輩は黙って僕の頭を抱くと、容赦無い力で抱きしめた。

「いたたたたっ、痛いです！先輩！」

「清澄、俺はなあ、今感動しているんだよ。アドバイスしてくれる先輩が入って来てくれたことに、さ……」

先輩はなお力を込めて頭を抱いてくる。流石ソフトテニス用のボールを片手で握りつぶすことが出来る馬鹿力を持つ先輩だ。

「誰が馬鹿力だ？ん？」

何も言っていないのに心を読み取られたことに、恐怖を感じると共に、自分の頭蓋骨が悲鳴を上げるかのようにミシミシといつていることにも恐怖を感じた。

「いたたたっ、わかりました。わかりましたよ」

「ん、それでいい」

腕の力をゆっくりと抜いて僕を解放した先輩はうんうんと頷いて、僕の背中を押した。

「頼んだぞ！俺は試合よりもここでの出会いに命を賭ける！」

やっぱり出会い目的か……。

溜息をつきながら、荷物が置いてある場所へと走っていく。

このソフトテニス部が勝てるとは思えない……。

だって、硬式のテニス部には熱くて燃え滾るような先生が居て、年がら年中休み無しで練習を

しているというのに、僕らソフトテニス部はほとんどお遊びで活動している。顧問の先生も別にソフトテニス以外の部活を兼任しているいわゆる『お飾り』の顧問でしかない。

僕はクラスの中で1番仲のいい浄やその他の友達と一緒に同じ部活に入るのではなく、『何となく』で、この部活に入った。野球部やサッカー部、硬式テニス部みたいに思い切り運動するのじゃなくて、授業の延長のように軽く運動するぐらいの部活に入りたかっただけだった。

今日で入部三日目だが、キツイと思うような練習は一切無かった。

中学ではピアノを弾くか本を読むかしかしてなかったのに、楽に練習についていける。それどころか、

「じゃあ清澄はレギュラーな。人数ギリギリだし」

と言って、ラケットすら買っていない僕をレギュラーにした。

本当に大丈夫なのだろうか……？この部活は……。

でも、練習が終われば皆さっさと帰っていくし、別に上下関係が特別に厳しいわけでもない。そこが、僕に合っている気がする。

孤独を少しでも薄めてくれる空間を作ってくれるのが、いいのだ。

息を切らして走りながらこの奇妙な部活の存在がたまらなく可笑しく思えて、笑えてきた。

僕らはあっさりと1回戦で破れた。

そして、先輩の作戦もあっさりと破れた。

取敢えず何もすることが無くなった僕らは、大会終了まで適当に時間を潰す為に他のコートを見て回った。

どの学校も汗をほとぼしらせ、白球を追いかけている。

僕らのような汗すら出さないふにゃふにゃした部員達がここに居ていいのか、と思いながら歩いていると、人が集まっているコートが目に入った。

よくは見えないが、どうやら女子ダブルスの試合のようだった。

ボールの「パコーン」という音が鳴る度に、人がワッとざわめく。その騒がしさが、僕らの足をそちらに向かわせた。

『今云高校 聖アルナス』

と書かれたスコアボードの下には、今の点数が記されている。

両者とも二本取っており、今のゲームが最終ゲームのようだった。

得点は『30対30』で並んでいる。

ゲームはドラマチックではあるけれど、これだけの要因で人が集まるとは思えなかった。

だけど、人を見て納得した。

今云高校の人達はギャラリーの所為で顔が見えなかった。でも顔の見た聖アルナス高校のダブルスの面々が凄かった。一人は頭からフランスパンを下げているかのような髪型の人で、もう

一人は世界史の授業で見たマリー・アントワネットみたいな頭で白球を追いかけている。

彼女達の一挙手一投足で場内が盛り上がる。

格好の割りに勢いのいい球を打つ彼女達も凄いけれど、それを返す今云高校のダブルスも凄かった。どんな子達が戦っているのかを見たくて少し人を掻き分けて前に来たけれど、後衛の子だけが見えない。背伸びをしながら前を向くけれど未だに見えなくてヤキモキしている内に、アルナスがマッチポイントを取ってギャラリーがグッと盛り上がる。

そして「いきますわよー！」という声がコートに響く。

湧いている観客の隙間を縫いながら、コートに近付く。

白球を打つ音が、聞えた。

そして、その後に声援が続く。

「みのりこー、いったよ！」

変な名前の子がいるのだなあ、と思いながら人込みを掻き分けて、最前列に出た。今云高校の子達に視線をやると、呼ばれた子が丁度玉を打ち返す瞬間だった。

「みのりこって……、言うな—————！！！！」

憎しみをぶつけるかのように振るそのラケットは、凄いスピードで風を切る。

そして、白球を捕え……、られなかった。

白球は思ったよりもバウンドせずにコートに転がり、その子のラケットは思い切り空を切る、どころか空を飛んだ。

ラケットはロケットになり、こちらにグングン近寄ってくる。

気付いた時には、僕は地面に寝転がり、空を見上げていた。

額に違和感があったので触ると、たんこぶが出来ていた。

「ごめんなさい！ほんとにごめんなさい！」

傍らで謝る女の子の声を、僕は知っている気がする。

「いや、大丈夫ですよ」

そう言って起き上がり、俯く彼女に声を掛けると、彼女は顔を上げた。

「ほんと、ごめんなさい！2回もアナタを……」

泣きそうな顔をしている与那崎実子の顔を見て、僕は『偶然にしちゃ出来すぎだよ』と思った

。

今日は高校生になって初めてのソフトテニスの公式試合。

何だか最近嫌なことが多すぎた。

だから、このもよもよをラケットに込めて振ろう。

思い切り。

中学でも入っていたソフトテニス部に入部したあたしは、一年生の部で同じクラスの千鶴ちゃんとダブルスで出ることになった。

本当はシングルの方が得意なのだけれど、千鶴ちゃんのダブルスのパートナーが試合直前まで決まらなくて、シングルしか経験の無いあたしが組んでみたら息がピッタリだったので、そのままダブルスを組むことになった。

千鶴ちゃんは

「みのりこ、お願いだから私の頭にボールぶつけないでね」

と、半ば本気の顔で言っていた。

「そんなことしないよ～。大丈夫、あたしを信じてよ！」

胸を張ってそう言うと、千鶴ちゃんは

「わかった！じゃあ、そのぺったんこの胸を信じるよ！」

と言って、微笑んだ。

ぺったんこじゃないもん！少しはあるもん！高校生になってから少しは成長したもん！

多分。

いや、きっと。

その後に起こった『事件』はあたしの『成長している』と言った胸を全否定した。

その前の日にはパンツまで否定されていたし、何だか最近否定ばかりで嫌になる。

試合前日の帰り道で千鶴ちゃんにその話をしたら、

「……私はみのりこを否定なんかしないよ！」

と言って力強く宣言して微笑んだ後、

「でも高校生にもなってアニマル柄のパンツは無いけどね」

と言って、自分の発言を覆した。

「なにさー、もーー！」

駄々っ子のように手をグルグル回しながら抗議して、戯れる。

「ほらほら、痛いよ、みのりこ。それはそうと、その『キヨズミ君』だっけ？その男の子には謝れたの？」

「うん……、看護師さんに『中学生』って言われた後に直ぐに帰っちゃったからまだちゃんとは謝れてないんだよね……。その前に謝ったのはいいけど、なんか緊張しちゃって変な謝り方しか出来なかったし。昨日病院に行ったらもう退院してたから……。何処に住んでるのかも分からないからもう謝れないよ……」

項垂れるあたしの肩をポンポンと叩いた後に千鶴ちゃんは頭を撫でてくれた。

「そっか……。でもまあ仕方ないよ。起こってしまったことは起こってしまったことだし、過ぎたことは過ぎたこと。気持ちを切り替えないと！それに、怒られたわけじゃないなら、特に彼も怒ってないでしょ」

「うん……。そうかなあ」

「そうだって！ほら、あんまり悩むと胸が縮む……。いや、もう縮むものが無いから、胸がエグれちゃうぞ」

「エグれるって何さー！ー！」

あははは、と笑う千鶴ちゃんの顔を見て、何だか安心した。

千鶴ちゃんは酷いことを言うけれど、優しい。

「だから、ほら。試合のことを考えなさい！明日の試合の相手、ソフトテニスで有名な聖アルナスなんだから！総合的な実力はあちらの方が上だけど明日出てくるのは一年生なんだし、そこまでの実力は無い筈。メンタル面で負けると、直ぐに負けちゃうぞ」

「うん。そうだね！あたし、頑張るよ！」

「その意気その意気。取敢えず今日までのもやもやを全て白球に込めてラケットを振れば、気分もクリアになるよ」

「だよ、ありがと、千鶴ちゃ……」

「みのりこは、単純だから」

「誰が単純だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そう言うと、千鶴ちゃん笑う。

電柱で鳴いているカラスも、それを笑っているかのように鳴く。

あたしも言葉では怒りながらも、口元は笑っていた。

試合当日、あたしは白球をもやもやだと思って追いかけてはラケットで叩いた。

そのお陰か、あたし達は聖アルナスと互角の戦いを繰り広げることが出来た。

聖アルナスのマリーアントワなんとかみみたいな髪形した人と頭からフランスパン下げてるような金髪の方は見た目の割りに機敏な動きをしてこちらを翻弄した。

だけど、なんとか食らいつけた。

そして今、両校とも2ポイント取ってて、得点は30対30。

サーブはこちらだ。

千鶴ちゃんがマリーアントワなんとかさんの方へ激しいサーブを打ちこむ、さらさらの金髪を

華麗に揺らしながら正確にボールをこちらに返してくる彼女。あたしが何とかそのボールに食らい付いてあちらのコートにボールを返したけれど、返す玉が甘かったのか、丁度あたしも千鶴ちゃんもないコートの隅の方にボールを打たれてしまった。

必死に走ってラケットに当てたはいいけれど、ガットの端にしか当たらず無かったので、ボールは思ったよりも飛ばず、ネットに当たってこちらのコートに落ちた。

40対30。

審判が「マッチポイント！」と叫ぶ。

いつの間にか集まったギャラリーがワッと盛り上がる。

『次の玉を返せなかったら、終わっちゃう』

そう考えると、手に汗を握ってしまう。

そんなあたしに気付いたのか、千鶴ちゃんはこちらを向いて口をパクパクとさせた。

『大丈夫』

声は出さなかったけど、その口は確実にそう言っていた。

胸にあった焦りが、少し和らぐ。

ありがとう、千鶴ちゃん。

「いきますわよ！」

聖アルナスのフランスパンの人が高々とボールを上げて、ラケットを振る。

心地いい音がして、白球がこちらへと向かってくるのが、スローモーションで分かった。

ボールの来る場所に回りこんで、ラケットを構えて降り始めたその瞬間、うちの高校のギャラリーが叫んだ。

「「みのりこー！いったよーーー！」」

「みのりこって、言うなーーー！」

そう叫びながらラケットを持っていた腕をいつもより早く振った。

それが、悲劇を呼んだ。

いつものスピードを予測してラケットを振ったので、タイミングがズレてしまったのだ。

あたしのラケットは空を切り、ボールがあたしの横を通り過ぎていく。

負けちゃった！

そう思った瞬間、あたしのラケットを持っている手が緩んで、ラケットが手を離れていく。

ラケットのごとく射出されたラケットは、スピードを増して観客の方へと向かっていく。

白球を追いかけていた皆の視線が、そちらに集中している。

ラケットはそのまま観客の一人に当たった。

ゴスツ、という鈍い音をさせて。

試合を放り出してラケットが当たった人のところまで走る。

なんてことをしちゃったんだろう。

何て言って謝ればいいのか分からない、ただひたすらに「ごめんなさい」を繰り返すことしか

出来ないだろう。せめて、清澄さんに謝った時みたいに妙な謝り方をしないように注意しないと……。

「ごめんなさーい！大丈夫……」

ぶつかった人を見て、あたしは言葉を失った。

頭にたんこぶを作って気絶しているのは、あの時病院で謝り損ねた清澄君だった。

「ほんと、ごめんなさい！2回もアナタを……」

謝るあたしの顔を見ながら、清澄君は両手を左右に振る。

「いいよ、この前のも今日のも事故だから……。気にしないで」

この一週間で二回も同じ人に怪我をさせるとは思わなかった。本当に申し訳なくて、泣きそうになる。

「ほんとに……、ごめんなさい……」

声が喉に詰まって出なくなる。ここで泣いたら相手を困らせるだけなのは分かっていたけれど、それでも負の感情が込み上げてきて、泣き出しそうだった。

「泣かないで。それだけ謝ってくれば、十分だから」

優しい声でそう囁く彼の声が、なお刺さる。もう駄目、泣く！と思った瞬間、後ろからラケットで殴られた。

頭を押さえながら振り返ると、そこには仁王立ちした千鶴ちゃんが立っていた。

「こらあ！みのりこ！キヨズミ君困ってるでしょ！そんな風に凹んでも彼がなお困るだけだよ！今はちゃんと謝る！」

滲んだ涙が、その言葉で乾いていく気がした。

「うん」

前に向き直り、清澄君を見つめる。

「清澄君、ごめんなさい。出来れば今回の件も含めて色々と償いたいです」

少し困り顔だった清澄君の顔が、和らぐ。

彼はこくりと頷いて、ポケットから携帯電話を出した。

「じゃあさ、連絡先教えてよ。で、詳細は後で話そう？」

あたしは清澄君の携帯を受け取ると、自分の携帯の番号を打ち込んだ。

猫がこちらを見ている。

と言っても、本物の猫じゃない。

ブラジャーに描かれた猫だ。

少し前のセールで手に入れたこのブラジャーは、私のお気に入りだ。本当はブラジャーだけじゃなくてお揃いのパンツも売っていたのだけれど、それは幼児体系の女に取られてしまった。上下の下着の柄が合わないのは少し気持ち悪いけれど、無いものは仕方ない。

ブラジャーを着けて、部屋の全身鏡で自分の姿を見る。

私も人のこと言えない、幼児体系じゃない……。

溜息をつくとき鏡に映るブラジャーの猫が、少し笑った気がした。

昨日降った雨の跡がまだ残る土曜日。

私は本を持って喫茶店へと向かっていた。

その喫茶店『時計屋』は、同級生である森乃英（もりの はな）がバイトしている。英曰く『明らかに道楽でしかやってない』と言うそのお店には、『時計屋』の名の通り、色々な壁掛け時計が壁中に飾ってある。そして、机の1つ1つに色々なジャンルの本の入った本棚が置かれている、という奇妙な店だ。店長が言うには『これは世界中の時刻を示しているのよ☆』だそうだ。

髭の濃いマスターのウインクは妙な艶があり、英にその話をしたら

「ああ、店長オカマバーも経営しているオカマさんだからね」

と、あっさりと言われて吃驚した。

でも、店の中で鳴る時計のコチコチという音が妙に心地よくて、私は二週に一回のペースで『時計屋』に顔を出している。

店長に

「良かったら此処でバイトしない？英ちゃんもいるんだし、どうかしら？」

と言われ、ここで働こうとも思ったが、英の『店長、死人出したくなかったらやめておいた方がいいですよ。悠も、殺人犯にはなりたくないでしょう？』という言葉に、怒りを覚えると共に、諦めも覚えて、丁寧にお断りをした。

苦い思い出を思い出したので、気分転換に立ち止まって空を見上げた。

昨日の雨が嘘のような晴れ間が広がっている。

長袖だと少し暑いぐらいだ。その暑さの所為で汗をかいてしまい、長袖の袖が腕に絡み付いくる。

此処から時計屋まではまだ大分歩くし、ジュースでも買っておこうかな。

丁度近くに自販機があったので、近寄って品定めをする。

取敢えず時計屋でコーヒーは飲むし、そんなに量はいらなからなあ……。

誰に言うわけでもなくそう呟いて、私は缶ジュースを買うことにした。

「たまには炭酸でも飲もうかな……」

100円玉2枚を入れて、『ナースペッパー』のボタンを押す。

小さな機械音の後に、小銭の落ちる音。

ん？

商品落ちてきたっけ？

取り出し口に手を入れると、中に何も無い。

「あああっ！お金吸われた！」

ああ、大した金額じゃないにせよ、何だかショックは大きい。

もう一度空を見上げて、大きく息を吸い込んで伸びをする。

胸に花の香りが入り込んできて、少しだけ気分が晴れた。

吐くのが勿体無いぐらいの爽やかな空気を吐き出して、目を開けようとしたその瞬間、顔に水滴が触れた。

雨がまた降ってきたのかと思って目を開けて上を向くと、頭上の街灯から、昨日降った雨の残りが降ってくるのが眼鏡越しに見えた私は、とっさにその水滴を避けた。

ドンッ

横に避けた瞬間に、誰かにぶつかった。

避け方が悪かったのか、私はバランスを崩して体の側面から地面にぶつかっていった。

「痛っ」

咄嗟に声が出たけれど、言う程痛くはない。ぶつかった側にかけていた鞆が幸いクッションになっていたようだ。

けれど、不幸なことも同時に存在していた。

そこには、大きな水溜りが出来ていたのだ。

バシャッ、という大きな音を立てて水飛沫が広がり、私の体に降り注ぐ。肌に水を受けながら、水がまだ冷たいことを実感した。

ああ、もう！また家に着替えに戻らなきゃいけない！

そう思ったのと同時に、自分が誰かにぶつかったことを思い出した。

いけない、謝らなきゃ。

起き上がって顔を上げると、誰かが目の前に手を差し伸べてくれた。

「大丈夫ですか？」

隣に中学生ぐらいの女の子を連れた高校生ぐらいの男の子が、こちらに向かって手を差し出している。

「すみません」

手を取って立ち上がり頭を下げる。

「ありがとうございます。あの……、先ほどもしかして私がぶつかっちゃったのって……」

「僕ですけど……、大丈夫ですよ。こちらは何も怪我もありません」

「そうですか」

ほっと胸を撫で下ろす。

「それよりも鞆、水を被ってましたけど大丈夫ですか……？」

「ああっ！」

急いで鞆を開けると、中に入れていた殆どのものが水に浸かっていた。

『時計屋』で借りた本が濡れている。

「ああっ！借りてた本が濡れてる……。どうしよう……」

嫌な汗が背中を滑る。

弁償……。

本を裏返すと、高校生の財布に地味に打撃を与えるような値段が書かれていた。

「どうしよう……」

濡れた本を胸に抱きながらもう一度そう呟く。

ああ、どうしてこんなことになったのよ。

腹がたつたらないわ。

体の底から湧き上がる誰にもぶつけることが出来ない怒りを感じながら、ギョツと目を閉じる

。

「あのっ」

悩んでいる私に、また彼が声を掛けてくれた。

「その本、僕も持ってて……。良かったら、あげますよ」

突然の申し出に、吃驚し、頭が混乱した。

「いやいやいや、自業自得ですし、悪いですよ」

「僕、この本は何度も読んでるんで、頭に入ってますから……」

そう言って彼は私にその本を無理矢理渡す。

「いえ……。でも、そんな……」

「いいですから……」

「じゃあ、せめて何かお礼を……」

「いや、それよりも早く着替えた方がいいですよ、風邪ひくといけないし……」

「えっ……。あっ……。そうですね……。じゃあ、携帯の番号だけでも」

私はそう言って胸に抱いていた本を鞆に仕舞うと、携帯電話を出す為にスカートのポケットに手を突っ込んだ。

その瞬間だった。

彼がボソリと、何か言ったのだ」

「猫だ」

「えっ……。？」

周囲を見渡しても、猫は居ない。

何を見てそう言っているのだろうか？

彼の方に顔を向けると、彼は私の方を向いたまま、固まっていた。

視線の先に、猫が居るの？

何処に？

というか、彼、私の胸に視線を……。

その時、思い出した。

今、自分が何柄の下着を身に着けているのかを。

『猫だ』という言葉の真意に気付いた瞬間、私の頭はパニックになった。

心臓は顔にどんどん血を送って、赤面を作り、脳味噌は恥ずかしさを私に知らせている。パニックになった頭の中で唯一働いたのが、怒りだった。

私の下着を見たな！

そんな怒りが、私に拳を握らせる。

ゆらりと彼に近付いた私は、前動作無しのボディーブローを食らわせる。

「カギマツ」

音に近い声を出して、膝から崩れ落ちた。

ハツとして、私は彼によりそう。

「うわーん、ごめんなさーい！でも、私の下着見た貴方が悪い、じゃなくて、もう、あの、ごめんなさー——————い！」

白目をむいて気絶する彼の隣で、私はそう、叫んだ。